

大学活性化経費による学部イベント開催の報告

SUGIYAMA エアライン・シンポジウムの開催 — “エアライン支援元年” の思いを込めて

木 村 隆・水 谷 行 宏

はじめに

筆者らは、平成 26 年度大学活性化経費（2 期分）の交付を得て、平成 26 年 12 月 18 日（木）第 5 限、国際コミュニケーション学部 206 講義室にて「SUGIYAMA エアライン・シンポジウム—キャリアとしての航空業界を考える—」を開催した。本稿においては、シンポジウムの概要とその実施結果について報告する。あわせてその教育上の効果についても考察を加えたい。

1. 本シンポジウム開催の背景と目的

オープンキャンパスや入試の面接などで高校生に本学部の志望理由を聞くと、将来航空業界で活躍したいと答える者が多い。また、入学後でも、多くの学生が就職先として航空業界を視野に入れている様子が窺える。一方で、航空業界にはどのような内容の仕事があるのか、また 1 カ月や 1 日の勤務スケジュールがどのように組まれているのかなど、その実態は学生にあまり知られていない。キャリアサポート室等が主催する業界セミナーを除けば、航空業界について知る機会はありません。ましてや現場で働いている卒業生から直接話を聞くような場は、教員の個人的なつながり以外には設けられていなかったと言ってよいだろう。

そこで筆者らは、航空業界で活躍している卒業生を大学に招き、この業界に関心を持っている大勢の在学生たちに業務内容を話してもらうことによって、女性が活躍できるキャリアとしての航空業界について考えさせる機会を設けたいと考えた。現役の客室乗務員やグラウンドスタッフを招聘するには、本人の承諾はもちろんのこと、勤務先からの承諾も得る必要がある。筆者らは平成 26 年 6 月より準備を開始し、幸いにも大学活性化経費の交付を得ることができたため、同年 12 月に実施するに至った次第である。

2. シンポジウム当日の様子

小澤英二学部長の挨拶のあと、水谷が航空業界を取り巻く昨今の動向や職種などについて説明した。続いて本学卒業生 4 名に、それぞれが現在行っている業務内容について発表してもらった。愛知県の旅客ハンドリング会社に勤務する卒業生（平成 23 年度卒業）はグラウンドスタッフとしての 1 日の仕事の流れと 1 カ月のスケジュールについて話し、同じ会社の航務部に勤務する卒業生（平成 24 年度卒業）は、ステーションコントロール業務・重量重心

管理業務・運行管理支援業務といった専門的な業務内容について説明した。国内航空会社に勤務する卒業生（平成 24 年度卒業）は入社後の訓練から現在の国際線乗務に至るまでの過程について話した。また別の国内航空会社に勤務する卒業生（平成 15 年度卒業）は、国内線客室乗務員としての業務を 1 泊 2 日のパターンを例に取って説明した。

さらに、グランドハンドリング業務に就いている卒業生（平成 25 年度卒業）からは資料のみによる参加があった。彼女は勤務地が遠方（北海道）のため事前に資料を筆者らに送付し、当日は木村と水谷が代理となって、彼女から送られてきたパワーポイントスライドや印刷資料の内容を説明した。

その後、木村がコーディネーターとなり、パネルディスカッションを行った。ここには、本年度のエアライン内定者を代表して、国内航空会社の客室乗務員内定 4 年生 1 名に加わってもらい、5 名でのディスカッションとした。卒業生 4 名には、航空業界で働きたいと思ったきっかけや、仕事から得られるやりがい、苦労などについて交互に話してもらった。また、航空業界を目指す上で学生のうちに身に付けておくといいことなどについてアドバイスももらった。4 年生の内定者には、いつ頃からどんな採用試験対策を行ったかなどについて具体的に報告してもらった。予定ではこの後、フロアから質問などを受けることになっていたが、設定時間と比して情報量の多いディスカッションとなったため、パネラーと司会者だけのやり取りにとどめた。

パネルディスカッションの後は、今年度エアライン各社から内定を得た 4 年生を紹介した。今年度のエアライン内定者 18（判明分）名のうち、本シンポジウムに出席した 8 名が登壇した。

その後、木村が閉会の挨拶をしてシンポジウムを終了した。

なお、参考資料として、グランドハンドリング業務に従事している卒業生（前述）から送付された資料・JAL 客室乗務員エントリーシート（2015 年採用実施分）・ANA 客室乗務員エントリーシート（2015 年採用実施分）・ドリームスカイ名古屋エントリーシート（2013 年採用実施分）・ドリームスカイ名古屋（株）の会社案内・（株）フジドリームエアラインズの会社案内・ANA エアラインスクール講座の案内などを資料袋に入れて出席者全員に配布した。

3. アンケートに寄せられた出席者の声

当日は東海地方では 9 年ぶりという大雪が降って交通機関も乱れたが、それにも関わらず、100 名以上の学生を含む 118 名が出席するという賑やかなシンポジウムとなった。また、公募制推薦入試等の受験者で、国際コミュニケーション棟エレベーター内のポスターを見て参加を希望した高校生 7 名も出席した。

シンポジウム終了後のアンケートには 73 名の学生らが回答してくれたが、そのうちの 62 名（85%）の学生が「大変参考になった」と答え、11 名（15%）が「参考になった」と答えた。「参考にならなかった」という回答は皆無であった。

また、自由記述の欄には40名の学生らが感想などを記入してくれていたが、その内容はおしなべて好意的なもので、本シンポジウムの開催への感謝を表すものであった。ほとんどの感想に含まれていたのが、「エアライン業界に就いている先輩の生の声が聞けて良かった」ということと、「エアライン業界についての知識を得ることができた」ということの2点である。卒業後10年のベテランにも参加してもらったが、あとの3名は卒業後2年～3年の先輩である。校舎内ですれ違ったこともあるかも知れない身近な先輩から話を聞くことは、在学生にとって夢の実現への大きな励みになったに違いない。またベテラン客室乗務員の話からは、結婚や出産・育児という女性特有のライフイベントと職業の両立について、不安や疑問を払拭することができた学生もいたようである。ある学生は、「結婚後も客室乗務員として活躍できることが確認でき、将来について頑張っていきたいという気持ちになりました」と述べている。「将来のことについて不安で、どうしたらいいのか悩んでいましたが、先輩方からの経験やアドバイスなどをいただいてすごく参考になったし、励みになりました」と書いた者もいたが、この学生も4人の先輩からの直接の話しかけによって悩みを吹っ切ることができたものと思われる。

エアライン業界での業務の実態に関しては、多くの出席者に新鮮な驚きがあったようで、ある学生は、「初めて知ることばかりで、一機の飛行機が飛び立つのにたくさんの方が携わっていることを改めて実感しました」と答えていた。また、「知っているつもりでも、知らなかった」ことがあることを発見した学生も多くいたと思われ、「1日のスケジュール、1カ月のスケジュールには驚くことがたくさんありました」というような感想がいくつも書いてあった。さらに、エアラインを志望している学生でもあまり耳にする機会のない、「航務部」や「グランドハンドリング」については、「客室乗務員やグランドスタッフの方だけでなく、普段なかなか話を聞く機会のない航務部の先輩のお話も聞くことができ、とても参考になりました」という感想があった。幅広い職種の卒業生に集まってもらったことは、きわめて有意義であったと考えられる。

今回のシンポジウムの教育上の効果として最も重要と思われることは、大学での学習目標の明確化とそれに向かう動機づけの高まりであろう。「憧れだけでなく、目標として明確に近づきたくなりました」という記述は、高嶺の花として憧れにとどめておこうとしていたエアライン業界への就職が、卒業生の話の聞いたり4年生内定者に接したりするうちに、自分でも到達可能な目標に変わって来たことを示唆している。「将来に向けて、自分のすべきことを考え直す良い機会になりました」という感想も同様な変化を示している。「自分の将来に向けて、早くから行動していきたい」「自分磨き頑張ります!」「これからの勉強をもっと頑張りたいと思いました」という多数の感想は、目標が明確になれば、それが大学での学びを積極的に捉えることにつながることを明瞭に示しているものと考えられる。

なお、アンケートは無記名式のものであったが、高校生からのものと思われる回答には次のような感想が書いてあった—「入学前にこのようなシンポジウムに参加させていただきありがとうございました。春からどのような自分磨きをすればいいか知れたので良かったで

す。大学生生活が楽しみになりました」というものである。航空業界に興味を持つ高校生にとっても今回のシンポジウムは、新年度からの大学生生活について考える上で有意義な機会であったと考えられる。高校生出席者に対しては、実質的な「入学前教育」としても一定の役割を果たした学部行事となったのではないだろうか。

おわりに

航空旅客数の増加や格安航空会社等の進出にともない、エアライン業界での求人は最近急増している。エアライン業界への就職は、かつては、一部の人にしか叶えられない夢のようなことのように捉えられていたが、現在はそうではない。多くの人が憧れる職業ではあることには違いないが、業界の各職種で求められる資質についてしっかりと理解し、在学中にそれらを身に付ければ、多くの相大生が実現させることのできる現実的な選択肢でもある。女性が出産・子育てをしながらでも仕事を続けられるよう制度を整える航空会社も出て来ている。

筆者らはエアライン業界を、女性がいつまでも生き生きとして活躍できる魅力ある職場であると考えている。しかしながら、これまで本学では大学全体として、特に教員の側からは積極的な支援をして来なかった。その意味で、平成26年は学内の“エアライン支援元年”であった。今後はこのシンポジウムを契機として、エアライン業界で活躍している卒業生の協力を得ながら、この業界への就職を目指す学生たちを支援していきたい。今回実施したアンケートやボランティアスタッフの学生からは、「90分では短かった」「大勢の中では質問しづらかったのでは」という意見が出されていた。来年度は時間をより長く設定し、また卒業生や内定者と個別に懇談できるような小グループでのセッションも設けて、参加者の期待に応えたいと考えている。

謝辞

今回のシンポジウム開催にあたっては、卒業生が勤める企業の方々をはじめ、事務室職員の方々、国際言語共同研究室の鈴木さんには格別にお世話になった。また、学生ボランティアスタッフにも事前準備と当日業務で協力してもらった。ストックウェル准教授とスクラガス非常勤講師には、ポスター制作や写真撮影で協力いただいた。この場を借りてお礼を申し上げたい。もちろん、今回のシンポジウムが実現したのは大学の財政的な支援があつてのことである。あわせてお礼を申し上げたい。



悪天候にも関わらず大勢の学生が詰めかけた会場の様子